神の救いの御計画の最初から最後まで
～創世記からヨハネの黙示録までを見通して～

聖書研究「聖なる者とされているのですから」
コロサイの信徒への手紙３章１１～１３節

＊聖なる者

私達は今パウロを通して語られる主の言葉を聞きました。「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから」と主は言われます。この言葉を聞いてどのように思われますか。「わたしは神に選ばれ、聖なる者とされている」と、他の人よりも偉くなったような、人よりも高い位置に居るような気分になりますか。それとも「聖なる者なんて、とんでもない、わたしにはとてもそんな資格はない」と思いますか。

どちらも大きな思い違いをしています。聖なる者というのは、聖人君主と言われるような、行いも言葉も生き様も清らかで正しく、間違いや失敗を犯すことはなく、憐れみ深く情け深い、崇高な人格の持ち主である、ということではありません。

＊聖

「聖」という言葉はもともとは、分離する、選び分ける、という意味です。そこから、神様の絶対的な尊厳を表わすのに「聖」という言葉を使うようになりました。神様は、人間やすべての被造物から完全に隔たっているお方です。すべてのものと全く違う存在であられるから「聖」なのです。

＊聖なる者とされる

ですから人間は「聖」ではありえません。それにもかかわらず、「聖」でない人間が「聖なる者」とされるというのは、どういうわけでしょうか。それは、神様が「あなたは聖なる者だ」と言ってくださるからです。その人自身が聖なる者になるのではないのです。またなれるものでもありません。どんなに清い生活をしても、良い行いを積んでも、どんなに信仰熱心でも、私達は罪ある人間です。憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けても、聖なる者にはなれません。

＊聖なる者の使命

神様は私達を「聖なる者」と呼んでくださいました。神様が私達を選んでくださったのは、神様の愛を周りの人達に手渡してほしいと願われたからです。私達は神様に愛されていることを知っています。神様がキリストをくださるほどに世を愛してくださっていることを知っています。ですから、私達は神様の祝福を、共に生きている方々に手渡すのです。

＊アブラハム

一番始めに神様から「聖なる者」と呼ばれたのはアブラハムです。主はアブラハムに言われました。

創世記１２：１～３「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。 12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」

アブラハムからイスラエル民族が生れていきます。イスラエル民族は主の祝福の源になるために、地上のすべての人々が主の祝福に入るために、選ばれたのでした。

今日の話の中では、イスラエルと言ったり、ヘブライ人と言ったり、ユダヤ人と言ったりします。厳密に言うと違いがありますが、同じ人達を言っていると思ってください。

＊アブラハム～出エジプト

アブラハムはカナンの地に入りました。アブラハム、イサク、ヤコブとカナンの地で暮らしましたが、この地を飢饉が襲いました。そこでヤコブと一族はエジプトに下ったのでした。エジプトでの奴隷生活、

そしてモーセによる出エジプトが行なわれます。

＊聖なる国民
　シナイ山に登ったモーセに主が言われます。
　出エジプト１９：５～６「 19:5 今、もしわたしの声に聞き従い／わたしの契約を守るならば／あなたたちはすべての民の間にあって／わたしの宝となる。世界はすべてわたしのものである。19:6 あなたたちは、わたしにとって／祭司の王国、聖なる国民となる。」
　そして主はイスラエルの民に十戒を与えられたのです。

＊再びカナンへ
　荒れ野での４０年が過ぎ、イスラエルの民は、再びカナンへ入っていきました。そこには他の民族の人達が住んでいます。そこで町に攻め込んで、その人達を滅ぼし尽くすのです。「滅ぼし尽くす」ということは、それらを自分達のものにするのではなく神様に捧げるという意味があります。もう一つの理由は、イスラエルがその地の神々を拝んで主に罪を犯すことにならないためです。
　申命記２０：１６～１８「20:16 あなたの神、主が嗣業として与えられる諸国の民に属する町々で息のある者は、一人も生かしておいてはならない。20:17 ヘト人、アモリ人、カナン人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人は、あなたの神、主が命じられたように必ず滅ぼし尽くさねばならない。20:18 それは、彼らがその神々に行ってきた、あらゆるいとうべき行為をあなたたちに教えてそれを行わせ、あなたたちがあなたたちの神、主に罪を犯すことのないためである。」

＊士師の時代
　カナンの地に入ったイスラエルは、町々に点在していました。この時代には士師と呼ばれる人達が指導者になりました。士師は常にいるのではありません。事があると士師が立たされるのです。主の目に悪とされることを行なうー主の裁きによる外敵の襲来ー救助を求める叫びー士師による救いーそして士師が死ぬとまた主に背く、が繰り返されます。

＊王を求める
　最後の士師となったのがサムエルです。人々はサムエルに王を求めました。最初にサウルが王になりました。サウルは南のユダ地方を治めました。ユダとイスラエルーイスラエル全体の王となったのはダビデです。しかし統一王国はダビデの子ソロモンで終わります。サウル・ダビデ・ソロモンと僅か３代続いただけでした。８６年の間のことでした。

＊分裂王国
　ソロモンの子の代になってイスラエルは北と南に分裂しました。ダビデの血統は南ユダ国の王に受け継がれていきます。この時代には、王も民も偶像礼拝に陥っていきました。カナンの地にもともと住んでいた人々の神々、外国の神々が入り込んだのです。南ユダ国には、ヒゼキヤやヨシヤのように宗教改革を行なった王がいましたが、多くの王については「主の目に悪とされることを行なった」と記されています。
　預言者達が興されました。民の罪を指摘し、主の裁きが下されると告げました。けれども、民は悔い改めることをしなかったのです。

＊滅亡
　北イスラエル国は約２００年後に、アッシリアによって滅ぼされました。首都サマリアは陥落し、人々はアッシリアに連れて行かれました。
　それから約２４０年後に南ユダ国もバビロニアによって滅ぼされるのです。首都エルサレムが陥落し、神殿は破壊されました。おもだった人達はバビロンに連れて行かれました。バビロン捕囚と言われている出来事です。ユダに残されたのは、貧しい人達だけでした。そのほかに、様々な地に逃げていった人達もいました。ユダの地域はバビロニアの州に組み入れられました。このようにしてイスラエルの国は滅亡したのです。

＊使命を果たせない

イスラエルがしてきたやり方では、主から与えられた使命を果たすことは出来ないのだ、ということがわかります。
イスラエルの民によって、地上のすべての氏族は主の祝福に入るはずだったのに、逆に、偶像がイスラエルの民を支配したのでした。偶像礼拝をする人々を滅ぼし尽くしてもだめだったのです。
イスラエルの歴史は戦争の歴史でした。戦争をして一時的に領土を得ましたが、最後はすべての地を失いました。
イスラエルに与えられた使命はどうなってしまうのでしょうか。こののちのイスラエルの歩みを辿りたいと思います。

＊エルサレム帰還
バビロンに捕囚となって連れてこられて５０年が過ぎました。この頃ペルシャが勢力を強め、バビロニアはペルシャに滅ぼされます。ユダの地はそのままペルシャの支配下に移りました。バビロンに囚われていた人々はエルサレムに帰ることが許されました。
けれども実際にエルサレムに帰ったのは僅かな人達です。多くの民は散っていった土地に住み続けたのでした。この人達が、ディアスポラと呼ばれる人達です。

＊神殿の再建
エルサレムに帰った人達は、様々な妨害に遭いながらも神殿を再建しました。エルサレムに帰って２０年が過ぎていました。城壁も築き直しました。
エズラとネヘミヤは民を皆集めて、モーセの書を読み聞かせました。
ネヘミヤ８：１～３「 8:1 民は皆、水の門の前にある広場に集まって一人の人のようになった。彼らは書記官エズラに主がイスラエルに授けられたモーセの律法の書を持って来るように求めた。 8:2 祭司エズラは律法を会衆の前に持って来た。そこには、男も女も、聞いて理解することのできる年齢に達した者は皆いた。第七の月の一日のことであった。8:3 彼は水の門の前にある広場に居並ぶ男女、理解することのできる年齢に達した者に向かって、夜明けから正午までそれを読み上げた。民は皆、その律法の書に耳を傾けた。」
人々は、律法に従って生きる暮らしを取り戻したのでした。

＊律法主義
しかし、人々が抱いていた夢は実現しませんでした。人々は、エルサレム帰還は第２の出エジプトであると捉えていたのです。人々は、再びイスラエル王国が出来て、繁栄することを夢見てユダの地に帰ってきたのでした。ところが、ユダの地は、バビロニアの属州であったものが、そのままペルシャの属州に変わっただけでした。繁栄とはほど遠く、困難な生活が続きました。人々の夢は破れたのです。人々の間に失望が広がっていきました。
「預言者達が言ったとおりだった。主に罪を犯したから、こんなひどい目に遭っているのだ。もう罪を犯すまい。」人々は厳格に律法を守るようになっていきました。安息日の厳守が厳しく行なわれました。異邦人の妻を持っている者は離婚しなければなりませんでした。

＊旧約聖書の終り
旧約聖書はこの時代の記述をもって終わります。旧約聖書に記されているのはおよそBC４００年頃までです。それからイエス様が生まれられるまでに約４００年があるのです。
４００年と言えば、今から江戸時代の初めくらいの年月です。今と江戸時代では、世の中も人の考え方も大きく違います。のちの時代の人達が今の私達を江戸時代の時代背景の中で思い描いたとしたら、とんでもない思い違いをします。私達は着物を着ていて、夜は行燈をともし、旅をするにはわらじを履いて歩いていることになってしまいます。
もしイエス様を４００年前の時代背景の中に置いたなら、同じようにおかしなことになるでしょう。

＊中間時代
聖書に記されていない４００年、これを中間時代とか、第２神殿時代と言いますが、この時代を知ることは、新約聖書をよりよく理解する助けになるでしょう。

＊アレクサンドロス大王
　人々がエルサレムに帰還して２００年あまりが過ぎました。この間はずっとペルシャの属州です。
　BC３３４年にギリシャのアレクサンドロスが広大な地域を征服しました。ペルシャも征服されました。ユダヤの人々は自発的にペルシャとの同盟関係をアレクサンドロスとの同盟に移したので、平穏なままで事は運びました。

＊ヘレニズム
　けれどもアレクサンドロスの征服はこれまでの征服とは違っていたのです。アレクサンドロス以前は軍事的な征服でしたが、アレクサンドロスは思想的な征服を試みたのでした。アレクサンドロスの征服によって芽生えてきた文化を「ヘレニズム」と言って、これ以前の古典的なギリシャ文化と区別します。

＊セレウコスとプトレマイオス
　しかしアレクサンドロスは熱病のため急死してしまいます。アレクサンドロスが征服した領土は４つに分割されました。イスラエル、シリアとペルシャはセレウコス朝、エジプトはプトレマイオス朝の支配となりました。
　イスラエルは２つの勢力の間の通路の場所にあります。２つの勢力の領土争いに巻き込まれました。イスラエルは始めはプトレマイオス朝のエジプト帝国に併合されました。この時代が約１２０年続きます。
　その後、紀元前２世紀になってシリアのセレウコス朝の権力の下に置かれました。

＊セレウコス朝
　セレウコス朝はヘレニズム文化をユダヤ人の生活のあらゆる面に押しつけてきました。アンティオコス４世エピファネスはユダヤ人社会を完全にヘレニズム化することによって、エジプトとの間に思想的、文化的な境界線を造ろうと考えたのです。彼はヘレニズムに対する抵抗の中心は宗教であると見て、宗教を排除しようとしました。神殿の儀式は止められ、聖書の破壊が命じられ、安息日を守ること、祭日、食物規定、割礼が禁止されました。エルサレムの神殿の境内にはゼウスのための祭壇が造られ豚が献げられました。民衆は新しい宗教を受け入れたしるしとして犠牲を献げることを命令されました。従わない者は拷問され殺されました。

＊マカベヤ戦争　ハスモネ王朝
　これに反抗して反乱が起こります。ハスモネ家の出身で年老いた祭司マッタテヤが決起したのです。５人の息子達が後を継ぎました。エルサレムの神殿にゼウスの祭壇が建てられた３年後に、神殿は清められ、神殿での宗教儀式が再開しました。
　信仰の自由を求める闘争に勝利しましたが、セレウコス朝が支配していることに変わりはありません。政治的な独立を得たのは、さらに２０年ほどのちのことです。５人の息子で生き残ったシモンが指導者でした。
　ハスモネ（マカベア）王国ができました。政治と宗教の両方の主導権がシモンとその子孫に与えられました。しかし、支配者の職と祭司の職が一人の人に与えられることは腐敗を産みました。こののちハスモネ家内部の権力争いが続きます。ハスモネ（マカベア）朝時代は１００年続きました。

＊ローマ帝国
　１００年が経った頃、北の方では、ローマの将軍ポンペイウスが、小アジアとシリアを征服しました。さらにローマ軍はエルサレムの神殿を包囲しました。紀元前６３年の安息日に、神殿に設けられていた要塞が突破されました。ポンペイウスは神殿の至聖所に足を踏み入れました。彼にとっては勝者の特権に過ぎなかったのでしょう。しかしユダヤ人にとっては、彼のやったことは究極の冒涜行為でした。ユダヤ人のローマへの不信と敵意は抜き差しならないものになりました。

＊状況の変化
　バビロン捕囚・エルサレム帰還からローマ帝国の支配までを駆け足で見てきました。
　ユダヤの人々は、国の滅亡とヘレニズムという、二つの打撃を受けたのです。人々が置かれている状況

は、大きく変わりました。

＊国の滅亡

イスラエルの信仰の中心は、土地、王制、神殿のあるエルサレム、この３つです。主はアブラハムに土地を与えると約束されたのでした。主は、ダビデの子孫がイスラエルをとこしえに治めると約束されたのでした。エルサレムとその神殿は神様が民を愛し民の間に臨在する目に見える証拠だったのです。神殿は神の家であり、神と民が出会うことの出来る場所でした。いけにえを献げる場所であり、祭りや行事の中心でした。この３つが、ユダ国の滅亡ですべて失われてしまったのです。

人々は土地と神殿から離れ、異教の中で生きなければならなくなりました。汚れをもたらすと考えていた人や物と毎日接触せざるを得ないのです。その上、汚れを取り除くための神殿や祭司はもうないのです。旧約の時代とは全く違う状況の中で生きなければなりませんでした。

＊ヘレニズム

さらにヘレニズムという、これまでとは全く違う文化が入ってきました。

ヘレニズムを伝統的なヘブライ人の文化と比較してみましょう。ヘブライの文化が田園生活的、農業的なのに対して→ヘレニズムは都会的です。一神教で、倫理を重んじ実用的なのに対し→多神論　汎神論（色々な神があるけれど、結局一つという考え）で思索を好む。人間と神の関係を強調するのに対し→世俗的、人間と人間の体に焦点をあてる。自己優先主義、孤立主義に対し→普遍的、混合主義。共同体を強調するのに対し→個人を強調するのでした。

ユダヤ人達は、これまでの文化とは違うヘレニズムの政治体制の中で生きなければならなかったのです。人々はこれに対抗しました。しかしヘレニズムがユダヤ教の中に入り込んだのも事実です。

＊信仰のあり方

このようなユダヤ人をとりまく状況の変化の中で、信仰のあり方も変わらざるを得ませんでした。神殿中心から律法重視へ。他民族からの孤立化。聖書の解釈。神殿について。王の制度について。メシヤの待望。この６つの点について、見ていきたいと思います。

＊１神殿から律法へ

信仰の中心が神殿の儀式から、律法を守ることへ移りました。

バビロン捕囚によって、人々は神殿も王もないところで生きる経験をしました。この経験によって、それまで神殿の儀式に置かれていた焦点が、律法の学びと律法を日々の生活で実行することへと移っていったのです。律法の学びと討論をする場として、会堂が町々に作られました。会堂が、信仰と生活のもとになる中心的な制度になりました。民の指導者は、神殿の儀式を司る祭司族から、一般人の律法の専門家・律法学者達に移っていきました。いけにえを献げることや儀式を行なうよりも、神との契約である律法を行なうことが、神の恵みに対する応答であると考えるようになったのです。

正しい行い、正しい行動が強調されました。日々の生活の中で、割礼を受けること、安息日を守ること、清いものと汚れたものの規定を守るのです。そうすることによって、聖なる民であろうとしたのでした。

＊２孤立

ユダヤ人達は孤立していきました。人々は異なる民族の中で暮らさなければなりませんでした。またヘレニズムという異なった文化の中で生きなければならなくなりました。聖なる民であることを保つために、他の民族と距離を置いたのです。孤立し、排他的になっていきました。異邦人は汚れた者とされました。

＊３聖書

聖書の解釈にも変化が起こりました。旧約聖書が書かれた前提となっていた状況と今の状況とでは、状況がまったく違うのです。そこで律法が示していることを、今の状況に合うように解釈することが必要になりました。以前は神殿や祭司達が行なっていた律法を、個人の生活の中でも守ることが求められるようになったので、日常の具体的な事柄に対する対応の仕方が問題になりました。

文字で書かれた律法であるモーセ五書（旧約聖書のはじめの５つの書）が重要であることに変わりはありません。それを生活に当てはめるための細かい規定が作られていったのです。これらは口で言い伝えら

れた律法です。口伝律法と言います。細かい規定を作りそれを守ることによって、律法を破らずにすむのです。律法を破らないようにと、律法の周りに細かい規定という塀を作ったのでした。
細かい規定を厳格に守った人々がファリサイ派の人々です。ファリサイというのは「分離する」という言葉から来ています。律法によって禁止されている汚れから自分達を切り離そうとしました。細かい規定を守らない人達から自分達を分離しました。ファリサイ派の人達はごく一般の市民です。

＊４神殿
神殿から律法へと焦点が移ったとはいえ、神殿が重要であることに変わりはありませんでした。それは、捕囚から帰還した人々がまっ先に神殿を再建したことからわかります。また、神殿を汚す政治的権力者に対して、猛烈に抵抗したことからもわかります。ユダヤにいる人達にとっても、各地に散っているディアスポラの人達にとっても、神殿は尊い聖い、いつもそこにある建物でした。毎年祭りには、巡礼者達が集まって神殿で礼拝を献げました。イスラエルの地にいる人達も、ディアスポラの人々も神殿税を規則正しく納めることによって、神殿を自発的に支えていました。

＊５王制
次に王制についてです。イスラエルでは、王は神によって統治する責任が与えられ、神の意思を実行する責任を負っています。預言者達は、神の裁きののちにイスラエルは回復する、ダビデの家による支配が戻ってくること告げていました。けれども、エズラ、ネヘミヤの時代には王制の復興はありませんでした。
ハスモネ王朝の時代はシモンと彼の子孫が王になりました。しかしハスモネ家は祭司の家系であり、ダビデの末ではありません。それは真の王が現われるまでの仮の王だったのです。人々は真の王を求め続けていました。

＊６メシア
王を求める願いがメシアの待望になっていきました。メシアは文字通りには「油注がれた者」という意味です。神からの油注ぎによって務めについている者がメシアです。イスラエルのすべての指導者・特に油注がれた王もメシアと言えます。メシアへの希望は、もともとはダビデの王制が再び確立されることでした。それはやがて一人の人がメシア、ダビデの子となることへと変わっていったのです。長い長い時代を、政治的にも宗教的にも外国に支配されて過ごしてきた人々です。政治的、宗教的な支配から解放されたいと、誰もが願っていました。この解放は、主によって油注がれた者メシアと神の国との出現によってもたらされると考えていたのです。人々はメシアを待ち望んでいました。

＊中間時代に
エルサレム帰還後から、イエス様が来られるまでの４００年あまりの間に、人々は律法主義に陥っていきました。
王国時代は、外から入って来る偶像が問題でした。偶像礼拝との戦いでした。ところが捕囚以後は偶像との戦いがなくなるのです。ほかの民族から自分達を分離して、自分達の中で、聖であることを追求していったのでした。律法を守っている自分達は神様の前に正しい者だ、自分達は神様に選ばれた聖なる民である、と思いました。
聖であるためには、汚れを取り除かなければなりません。汚れに触れることによって、自分が聖でなくなることを避けねばなりません。そこで、汚れを排除することをしていったのです。異邦人、徴税人、汚れた病気の人、そして女性も、排除される対象になりました。
イスラエルの人々は、聖なる自分達と汚れた人々の間に隔ての壁を造ったのです。その隔ての壁は、時とともに、ますます厚く高くなっていきました。
イスラエルが聖なる民として選ばれたのは、地上のすべての氏族が主の祝福に入るためだったはずです。ところがイスラエルはそれとは真逆な生き方をしたのでした。それでいて自分達は聖なる民だと思っていたのです。

＊イエスの言動
このようなユダヤ社会にイエス様は生れられたのです。イエス様は安息日に会堂に入って権威ある者としてお教えになりました。中風の人に「子よ、あなたの罪は赦される」と言われました。多くの徴税人や

罪人と食事をされました。安息日に片手の萎えた人を癒されました。イエス様の弟子達は安息日に、歩きながら麦の穂を摘みました。洗わない手で食事をしました。イエス様のなさることや言われることはことごとく、ファリサイ派や律法学者達には受け入れ難いものだったのです。そのわけは、今まで見てきたことから理解出来ます。
　ファリサイ派の人々や律法学者達はどのようにしてイエス様を殺そうかと相談し始めたのでした。

＊神殿を汚したと言って
　エルサレムに来られたイエス様は、神殿で売り買いしていた人々を追い出されました。神殿でのイエス様の言動が、ことさら祭司長達や律法学者達の気にさわったということも、今見てきたことから、良くわかります。神殿は何よりも大切な特別な場所であったのです。彼らがイエス様を訴える理由として挙げたのも神殿に関することでした。「この男が、『わたしは人間の手で造ったこの神殿を打ち倒し、三日あれば、手で造らない別の神殿を建ててみせる』と言うのを、わたしたちは聞きました」と訴えています。

＊十字架にかけた人々
　人々は、律法を守っていない、神を汚す者だと言ってイエス様を十字架にかけて殺しました。イエス様を十字架にかけたのは、異邦人ではありません。神様を知らない人達ではないのです。神様を信じていると思っている人達、自分達は聖なる者であると思っている人達が、イエス様を十字架にかけたのです。

＊キリストによる成就
　イエス様は十字架に死なれました。イエス様がすべての人々のすべての罪を贖ってくださったのです。キリストの贖いによって、地上のすべての氏族は主の祝福に入れられたのです。
　「そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。」
　聖なる民とされたイスラエルが果たし得なかった使命を、イエス・キリストが成し遂げてくださったのでした。

＊私達は省みる
　私達は神に選ばれ聖なる者とされています。
　今、私達は自らを省みる必要があるのではないでしょうか。私達も、聖なる民イスラエルと同じことをしているのではないかと問う必要があります。聖なる民イスラエルと同じに間違った選民意識を持っているのではないかと、問う必要があります。
　信仰の名によって、人々を排除してきたのではないか。信仰している者とそうでない者の間に壁を造ったのは、私達自身ではなかったのか。そのようにして囲った領土を拡張することによって、自分達の勢力を拡大することによって、神の国を実現させようとしてきたのではないか、と問うのです。
　信仰を持っていない人に対して、奇妙な高ぶった思いを持ってはいませんか。信仰を持っていない人を憐れみの目で見てはいませんか。その人達との間に壁を造ってはいませんか。自分達は壁の中で聖であることを追い求めているのではありませんか。
　祝福の源になるどころではありません。「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」どころではない、私達が、地上の氏族すべてが主の祝福に入るのを妨げているのです。
　イエス様を殺したのは、自分達は聖なる者だと思っていた人達なのです。自分達は神様の前に正しいことをしていると思っていたのです。私達もイエス様を十字架につける者ではないでしょうか。まるで異邦人がイエス様を殺したかのように、信仰のない人達が悔い改めて信仰を持つように、と言っている場合ではないでしょう。悔い改めが必要なのは私達自身です。

＊立ち帰る時
　今、最初の使命「地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る」に立ち帰る時です。イエス・キリストがすでにこの使命を成し遂げてくださっているのです。地上のすべての氏族は、キリストによって祝福に入れられているのです。キリストに立ち帰りましょう。救いを成し遂げてくださった主イエス･キリストが、私達を選び、聖なる者とし、愛してくださっているのです。私達はキリストの贖いによって神様から

和解をいただいているのです。神と人とのあるべき関係に帰らせていただいています。

＊エデンの園
　神と人とのあるべき関係がエデンの園の物語に表わされています。そこでは、神様と人とは信頼で結ばれていました。人は神様の前に裸でいられたのです。ありのままの自分で、神様と顔を合わせてお話が出来たということです。そこでは人と人も裸でいられました。「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。」とあります。
　どこを見られても恥ずかしいところはない、完全無欠な人間であったということではないでしょう。恥ずかしいところがある、弱いところ、汚れているところ、傷があるところがある、でもそれを見られても恥ずかしくない、それを隠さないでよかったのです。
　裸で神様の前にいられた人間は、他の人とも一緒に裸でいられたのでした。

＊罪
　ところが人は裸でいられなくなってしまったのです。神様に背いたからです。
　創世記３：６～１０「 3:6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。3:7 二人の目は開け、自分達が裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。3:8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、3:9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」3:10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」
　私達は何と長い間、幾重にも身を覆い、自分を隠して生きてきたことでしょうか。自分を守るためにはそうするしかありませんでした。

＊神との和解
　けれど、今、私達はキリストの贖いによって神様から和解をいただいているのです。今は、神様の前で裸で生きられるのです。神様が欠けだらけ、傷だらけのわたしをそのまま受け入れてくださっているからです。
　神様の前に正しく清く生きているように装ってきた、信仰深そうに装ってきた、そのすべてを脱ぎ捨てます。
　そこに現われてくるのは、ふるえている魂です。人に傷つけられているわたしがいます、その人を愛せない。赦すことなど、とても出来ない。自分を守るために人を傷つけ殺すわたしがいます。思い上がり自慢しているわたしがいます。人と比べて落ち込んでいるわたしがいます。嫉妬しているわたしがいます。人の言葉を素直に受け取れないわたしがいます。
　それでも大丈夫。あるがままのわたしで神様の前に立ちます。神様は、わたしをそのまま、まるごと包んでくださいます。

＊人の中で
　この安心がある時、自分も自分の弱さや欠けを受け入れることが出来るようになります。すると、人に対しても裸でいられるようになるのです。
　わたしは裸のわたしで、裸のあなたに向き合いたい。

＊わかる
　相手もわたしと同じふるえる魂を持っていることがわかります。わたしと同じ、傷つき、痛み、苦しみ、涙を流す人であることがわかります。「自分を守るために人を傷つけ殺すのですね。」「あなたも、諸々の衣をまとって生きてこざるを得なかったのですね。」
　魂と魂が触れ合う、ここに、小さい、けれど確かな愛が生まれます。

＊危険
　けれども、裸で人と向き合うことは危険なことです。相手は武装してわたしに相対しているのです。傷つけられるでしょう。殺されるかもしれません。

イエス様は殺されました。
わたしはイエス様と同じように出来ません。わたしは逃げ出すでしょう。情けないわたしです。この情けない自分のままで神様の前に行きます。神様のふところに飛び込みます。

＊完成に向かって
神様が願っておられることは、すべての人々が神様のところに帰って来ることです。そのために、神様は、イスラエルの民を用いて、地上のすべての氏族を神様の祝福に入れようとされました。けれどもイスラエルは使命を果たすことが出来なかったのです。
イエス･キリストが地上に来られ、すべての人々の救いを成し遂げてくださいました。すでにキリストによる救いは実現しています。

＊今の時
私達が生きている今この時は、救いの完成に向かっている時です。今しばらく、苦しみの時代を過ごさなければならないでしょう。けれど聖書は救いの完成を見させてくださっています。

＊ヨハネの黙示録
ヨハネの黙示録は、救いの完成を記しています。それはヨハネの見た幻として示されています。
黙示録５：１～５「5:1 またわたしは、玉座に座っておられる方の右の手に巻物があるのを見た。表にも裏にも字が書いてあり、七つの封印で封じられていた。5:2 また、一人の力強い天使が、「封印を解いて、この巻物を開くのにふさわしい者はだれか」と大声で告げるのを見た。5:3 しかし、天にも地にも地の下にも、この巻物を開くことのできる者、見ることのできる者は、だれもいなかった。5:4 この巻物を開くにも、見るにも、ふさわしい者がだれも見当たらなかったので、わたしは激しく泣いていた。5:5 すると、長老の一人がわたしに言った。「泣くな。見よ。ユダ族から出た獅子、ダビデのひこばえが勝利を得たので、七つの封印を開いて、その巻物を開くことができる。」
これから神様がなさろうとしておられることが巻物に記されています。けれどもこの巻物を開くにふさわしい者は一人もいません。すべて罪ある人間です。人は誰一人として神様の御計画を知ることが許されないのです。
それなのに、その誰にも許されていない事柄を知ることとなったのは、屠られた小羊が勝利を得たからでした。十字架にかかり復活されたキリストが人間の罪に勝利されたので、これから起こることが私達に知らされたのです。「人間達に知らせても大丈夫だ、災いが襲ってきても、そこにキリストがいる、行き着く先がキリストの勝利によって確かなものとなった、だから知らせても大丈夫」と神様は思われたのでしょう。

＊どの場面にも
黙示録には恐ろしい災いが記されています。けれどもどの場面にもどの場面にも、屠られた小羊キリストがおられるのです。キリストが巻物を開いておられるのですから、どの場面にもキリストがおられます。キリストがおられるから大丈夫なのです。恐ろしい災いをくぐり抜けることが出来、先に希望を見ることが出来ます。

＊二つのグループ
黙示録では人々が二つのグループに分けられています。小羊の命の書に名が書かれている人達と、獣の刻印を押された人達です。すなわちキリストの救いに入れられている者と、神に敵対するサタンに支配されている者です。
自分はキリストを信じて救われるグループに入っている、キリストを信じない人達は滅びる人達だ、とその人達を冷ややかな目で見るならば、その人達より上に自分を置いて、信仰のない人を救ってやろうと思うならば、それはイスラエルの選民意識と同じです。
私達も罪ある者、キリストの贖いによって救われている者に過ぎないではありませんか。誤った選民意識を持っていることに気付くことが大切です。

＊救いの完成

黙示録の最後に、再び来たり給うキリストがもたらしてくださる新しい天と新しい地が示されます。救いの完成です。
黙示録２１：２２～２７「21:22 わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。21:23 この都には、それを照らす太陽も月も、必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。 21:24 諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。21:25 都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。21:26 人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。21:27 しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。」
都の門は決して閉ざされることはありません。門はいつも開いています。いつでも誰でも都に入ることが出来ます。
「21:24 諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。」とあります。「諸国の民」は黙示録においては、この世の力にひざまずき、神の怒りを招くみだらな行いに陥っている民なのです。サタンによって惑わされている民です。神の怒りによって倒される民として記されています。この諸国の民が、都に来るのです。
また、地上の王達は、黙示録においては、この世の繁栄に浸かり、贅沢に暮らしている王達です。キリストに対して戦いを挑む王達です。この地上の王達が自分達の栄光を携えて、都に来るのです。
諸国の民、地上の王－サタンに惑わされ、サタンに栄光を表わしていた人達が、新しい都では神とキリストに栄光を献げるのです。人々はサタンの惑わしから、罪から解放されます。都に入ることが出来ます。

＊すべての人が
それでも都に入ることが出来ない人達がいるのでしょうか。
「21:27 しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。」とあります。汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者、とは誰ですか。あの人、この人ですか。そうではありません。私達自身です。そのような者であるのに名が命の書に書かれるのは、屠られた小羊キリストが、「あなたはわたしのものだ」と名を記してくださるからです。私達には何の資格もありません。ただキリストの赦しのゆえに、です。
主イエス･キリストは都の外で十字架にかかられました。キリストは、「決して都に入れない」とされている人達のところにおられるのです。「さあ、わたしと一緒に行こう」と手を引いてくださいます。都の門はもう決して閉ざされることはないのです。永遠に門は開いているのです。都に入れない人がどこにいるのでしょうか。

＊エデンの園
新しい都の様子が記されています。
黙示録２２：１～４「 22:1 天使はまた、神と小羊の玉座から流れ出て、水晶のように輝く命の水の川をわたしに見せた。22:2 川は、都の大通りの中央を流れ、その両岸には命の木があって、年に十二回実を結び、毎月実をみのらせる。そして、その木の葉は諸国の民の病を治す。22:3 もはや、呪われるものは何一つない。神と小羊の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、22:4 御顔を仰ぎ見る。彼らの額には、神の名が記されている。」
新しい都には、エデンの園のように、命の木があります。いつも実をつけています。人々は、エデンの園でそうだったように、神様と顔を合わせて生きることが出来ます。
私達はキリストによる救いの完成を見させていただいています。

＊聖書
聖書は旧約聖書の最初から新約聖書の最後まで、神様の救いの御計画を記しています。聖書のすべては、屠られた小羊キリストによる救いの完成に向かっているのです。私達は今日、神様の救いの御計画の最初から最後までを見させていただきました。

＊結語
私達はこの救いの御計画の中で、この時代に生きるようにと生を与えられています。神様は一人一人に

それぞれの使命を与え「生きよ」と言わます。
私達は主の救いの御計画に生かされています。
すべての人々が、主の救いの御計画に入れられています。
喜びが溢れてきます。
心からの感謝と賛美を主に献げます。

山本美智子

（2017年3月28日　日本バプテスト同盟全国女性会年会にて）